

京鹿子

平成十六年九月一日発行
通巻第六十一号 価格 一冊 二百五十円

9月号

豊田都峰

心響集 その九

浮御堂近し浮巢をかくす叢

湖国雨浮巢の高さ思ひある

片虹を立たせ山里ほのめけり

虹消えてまたあてもなきもの待ちに

草茂る遠き宮処の碑はいづこ

涼風や柳すぢまたけやき筋



合 歡 咲 いて 川 風 も ま た 夕 す が た
借 景 は ど こ も 比 叡 の 梅 雨 晴 間
元 勲 の 邸 址 梅 雨 晴 の 三 十 六 峰
庭 よ り の 風 正 面 や 夏 座 敷
夏 落 葉 沈 み て 淀 む こ と に 果 つ
落 し 文 林 の 奥 の 風 の こ 糸
椎 落 葉 か か は る な に も な き ま ま に

「俳句界十月号特別作品二句」「ウエツブ俳句通信八一号七句」掲載

— 故 丸山佳子 作品 —

海^{わた} の中

故
丸山佳子



鵜の島へ波が波追ふことやめず
日柱をよぎる朝鵜のいさぎよし
鵜のかへる原始林あり海^{わた}の中
日焼せし手の六感や鯛を釣る
鯛を釣る蝦のまみどり目に愛す

秀華採集

青芝や光と見しは遠会釈

奥田筆子

「遠会釈」のこちらへの思いを「光」と把握するところに、好意を全面的に受け入れる意図があますところなく出ている。こんな思いの交換がこちらこちらで行われたなら、世の中は明るさに満ちることであろう。

葉ざくらのその後だはだは風の道

内山萬壽

地べたよりはじまる石段梅雨の闇

古林美世子

前句は「葉ざくら」の実相が把握されており、「だはだは」の擬態表現がよい。後句は「梅雨の闇」の根底が「地べた」というしつかりしたものに認識されていることに安心感がある。



— 近 詠 —

蝉しぐれ

鈴鹿 仁

史を追へば雲へ目のゆく桐の花
蝉しぐれ茶房の窓を震わせる

— 追 懐 —

誕生石輝く今宵菊薫る

〔昭和三十六年作〕
〔母誕生会〕

薯満つ今宵にひびく祝ひ唄

〔昭和三十六年作〕
〔母誕生会〕

岩つばめダム放水を好きとする

〔昭和四十八年作〕
〔黒四吟旅〕



— 近 詠 —

會津

和田 照海

銃 痕 の ひ と つ を 隠 す 蔦 若 葉
硝 煙 の 匂 ひ は 今 も 若 葉 寒
青 葉 騒 い づ れ 武 士 歩 き し て
飯 盛 の 水 い さ ぎ よ し 著 莪 の 花
夏 ひ ば り 揚 げ て 會 津 の と の ぐ も り



神麓集

羊 草 藤 岡 紫 水
池よりの風夢殿へ羊草
眠ければ眠る老残柿の花
夜の五更風の湿りも網戸越し
すれ違ふをんなに酔の香街薄暑
急かぬゆえ先にお行きよ蝸牛

金芒銀芒

故竹貫示虹

限りなき夜永のはじめ君逝きて
秋出水低きへ流るだけなれど
竹の葉の露ひとつぶのいのちなる
目も口も穴の埴輪を秋の風
一陣の風金芒銀芒

松田都青

麦の秋万年補欠の子が走る
五月闇恋はボタンの掛け違ひ
短か夜や夢の重さで目が覚める
更衣して鬱の種取り替へる
遮二無二の二が離れない五月闇

夢 幻 北川孝子
梅雨穂草捨つるに始まる老ひ支度
ラムネ抜くわが青春の夢幻たり
語らひの祖霊に触れて夏座敷
ゆるゆると残り世思ふ汗のあと
ほどほどてふ身の処し方や小暑来る

洛南

丸井巴水

紫陽花の安堵の円さ神遊ぶ
小滝にも壺あり古き懸の創
神木のか細き注連や蟬生まる
首桶の届きし郷の青葉風
洛南の神の裾絵となる四葩

リラの夜

塩貝朱千

はらはらと薔薇のハートを掌に受けむ
雛かるがも冒険してもママの傍
母鴨の子を呼ぶこゑや水速し
チエロの音は慕情にも似てリラの夜
花檸檬をんな笑がほで頷ひて



京鹿子集

豊田都峰選

青芝や光と見しは遠会釈

京都 奥田 筆子

梟に一拍遅れの夏が来る

菖蒲湯やタオル絞りはみな父似
旅半ば茶房は新茶に和菓子添へ

すかんぼやぼんと豎穴ありにけり

青芦や友の奏でしハーブ澄む

アリソナ 伊吹 之博

反転し蝶にもありし奪ふ恋

花みづきアメリカ時間で通話する

葉ざぐらのその後たはだは風の道

鎌倉 内山 萬壽

法華経諳んず老鶯修行寺

枝豆の食べ方巧し米紳士
石畳見えぬ目印蟻の列

「空」の額写経座敷に緑さす

オハイオ 水谷 直子

夏落葉地に帰る日のやつてくる

夏の夜の竜巻警報息をとめ
緑蔭や小鳥と共に深呼吸

地べたよりはじまる石段梅雨の闇

相生 古林美世子

脇役で通す一生柿の花

風薫る頬なづる髪目を閉ぢて
万緑や大空の青見え隠れ

若人のためらひもなき夏衣

札幌 野村 鞆枝

水の辺に子等のはしやぎて夏に入る

蝦夷大地一足とびに夏来たる

登り来し谷間に仄か余花明かり

葉桜や宴の後の佇ひ

酒田 藤波 松山

蝸牛葉裏安居と見つけたり

雨蛙鳴けば確かに雨になり

初燕通りを右に折れて飛び

短か夜は夜なべ仕事に時足らず

越後路は与板刃物の初夏ひびく

新潟の米所嬉し田植すみ

日本一米所の田は青々と

薔薇の門シヨパン洩れ来て朝散歩

さまま 神田 惣介

チンドン屋太鼓に日傘アーケード

制服は皆大きめや入学子

園児達大志抱けよ鯉のぼり

万葉の溶け込む沼や残り鴨

花筏返事は背で押し通す

鳶の羽ぎざぎざかさし花の天

蝶生まる人工滝の音とばし

セロファンの震へ母の日なんてなかつた

直江 裕子

青葉若葉きれいな角膜やるといふ

化身への思ひいまだに五月闇

ソーダ水人に狎れるを恐れけり

薔薇一輪以下省略といふ本気

たんぼぼの兄弟今日もアフロヘア

ペンギンの砲弾泳ぎ青い闇

芝青む姉妹の競ふ二重跳び

リラ盛る休み田に生るビルの街

原宿やお薦めご膳に初鯉

夕立や駅に傘持つ妣のこと

草笛をまつすぐ吹きし子は父に

さくらんぼころころ笑ふ人とある

山鳩の声を残して梅雨の入り

はまなすの向かうは佐渡よ妣おはず

地震後の新茶のみどり萩茶碗

ラベンダー香りは風に夫遠し

聖五月三人寄りて介護論

妣の声垣根を通し著我咲けり

紙魚つれて父の筆跡元気かと

白玉の凹みて何も彼もあした

一瞬の方向音痴黒揚羽

青葉騒ふつと赤ベコの首動く

佐々木紗知

布川 孝子

高野 春子

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉